

白田町埋蔵文化財調査報告書第8集

# 白田町芦内開発地区試掘調査報告書

平成6年3月

長野県南佐久郡白田町教育委員会

## 序

白田町教育委員会

教育長 新 津 真 澄

白田町の田口村区、田口区、田ノ口区の3財産区有林にかかわる芦内地籍において、18ホール・126.5ヘクタールにおよぶゴルフ場開発計画にともなう基本構想が提出されました。次いで、地元では芦内地区開発促進委員会が組織されたのが、昭和62年のことでありました。以来その推進について、各関係機関・団体等関係者の連絡協議が図られてきましたが、このたび環境アセスの一環として、平成5年11月3日から11月30日まで、当該地区の埋蔵文化財調査を実施いたしました。

この調査は、芦内地区9万平方メートルの範囲内で、10箇所を発掘点を定めて行われましたが、夫々3箇所の地点で遺跡が認められました。中央部では、平安時代中期の住居跡が検出され、特に鉄滓が出土していることから磁鉄鉱などから鉄を作っていた可能性が認められました。また、中央北部では平安時代の土器も出土したこと、中央西南の地点からは奈良時代から平安時代までの遺物と、縄文時代の打製石斧、石鏃、黒曜石片などが出土していることから先住民の生活の拠点があったことが伺われます。

ここに報告書を発刊するにあたり、調査に関係してそれに応じて下さった地権者の方々をはじめ、島田恵子担当調査員、ご協力いただいた皆さんに衷心より感謝し、本書の活用を念じております。

## 本文目次

序	
第1章 試掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 試掘調査の概要	1
第3節 試掘調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 考古学的環境	5
第3章 調査状況	11
第1節 調査方法・基本層序	11
第2節 地区別遺跡の範囲確認と出土遺物	11
第4章 まとめ	24

## 付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	7
-------------	---

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	6
第2図 開発地試掘全体図	10
第3図 8区検出住居址実測図	19
第4図 住居址出土石鍬実測図	21
第5図 住居址出土土器実測図	21
第6図 溝実測図	22
第7図 溝出土遺物	23
第8図 10区土坑実測図	24
第9図 10区出土石鍬実測図	24

## 図 版 目 次

- 図版一 1 芦内遺跡全景 2 1区層序断面 3 2区層序断面
- 図版二 1 2区層序断面 2 3区層序断面
- 図版三 1 4区層序断面 2 5区桑畑全景 3 5区層序断面
- 図版四 1 6区層序断面 2 7区層序断面 3 7区林風景
- 図版五 1 8区湧水付近のトレンチ 2 9区林風景  
3 10区土器出土小トレンチ 4 10区トレンチ
- 図版六 1 8区住居址検出の林 2 住居址全景
- 図版七 1 8区住居址出土土器 2 8区住居址出土甕破片  
3 8区住居址出土土坏、灰釉陶器片 4 8区住居址出土の石鍬  
5 8区住居址出土の鉄滓
- 図版八 1 10区溝全景 2 10区土坑全景 3 3区・9区出土土器  
4 石鍬・溝出土黒曜石剥片 5 10区出土土器 6 10区出土石鍬片

## 第1章 試掘調査の経緯

### 第1節 調査に至る動機

近年、ゴルフは余暇の増大と多様化に伴って、国民各層に浸透し、大衆スポーツとして定着してきました。

こうした社会情勢の中、臼田町においても、地域の土地利用の高度化の推進と地域の活性化など町の振興のため、臼田町田口芦内地籍にゴルフ場建設が計画され、平成4年8月、臼田ゴルフ倶楽部田口コース建設事業に係る環境影響評価準備書が県へ提出されました。

これに伴い、県教育委員会文化課の指導により、事業計画地内に埋蔵文化財包蔵地が存在するかどうかを確認する試掘調査を実施することになりました。（事務局）

### 第2節 試掘調査の概要

- 補助事業名 町内遺跡発掘調査事業
  - 所在地 長野県南佐久郡臼田町大字田口字芦内3521番地外
  - 調査期間 平成5年11月3日～11月30日
  - 調査に関する事務局
    - 新津 真澄 臼田町教育委員会 教育長
    - 宮沢 俊雄 “ ” 総務教育課長
    - 桜井 昭一 “ ” 社会教育係長
    - 丸山 正俊 臼田町文化センター館長
  - 調査団組織
    - 団 長 三石 延雄（長野県考古学会員）
    - 副 団 長 丸山 正俊（臼田町文化センター館長）
    - 担 当 者 島田 恵子（長野県考古学会員・南佐久郡誌刊行会常任編纂委員）
    - 調 査 員 佐々木春蔵、吉沢 靖（長野県考古学会員）
    - 調査補助員 有井 忠雄（小海町誌編纂委員）
    - 協 力 者 柳沢 春子、油井 千弘、油井あき子、新津 きし（以上地元協力者）
- 本書の執筆、編集は島田が行い、丸山正俊副団長が校閲・監修した。  
石器の実測・トレース・執筆は、吉沢 靖が担当した。

### 第3節 試掘調査日誌

- 11月3日(水) 団長に出席いただいて担当者、調査員で調査方法について打合せ会を行なう。試掘地の検討と共に予定地の地図を作成する。明日、町の企画室から開発についての説明、注意事項などを聞くことにして解散。
- 11月4日(木) はれ 丸山副団長が連絡をとり、企画室から小林氏、林務課から大工原氏に出席いただいて合同打合せ会を行なう。開発地内での注意事項、地主さんへの連絡事項などについて両者から話を伺う。
- 10時から現場へ行き、昨日作成した地図を元に踏査する。芦内遺跡隣接地のからまつ林を掘ると石鏝の完形品がいきなり出土し一同驚く。
- 午後にも現地を見まわり地図に添って試掘場所を決めるが、ほぼ机上での計画通りに現場の地形が重なった。3時半文化センターにもどり道具の準備にかかる。
- 11月5日(金) はれ 本日より重機が入る。北西端側の尾根に4箇所試掘坑を入れる。尾根には森林腐植土少なくいきなりローム層になったり、ローム層の下に腐植土があったりと変化のみられる地層で遺物、遺溝の気配全くない。1区午前で終了。
- 午後から2区に入り、夕方まで13箇所の地点にバックホーで試掘坑を入れる。ここは尾根から下った地点であるため、上面表土層から森林腐植土となり厚く堆積しているところと、少し地面が高くなると腐植土が流れたのかローム層が多くなる。付近に湧水がないためか、日当りよく平坦地なのに遺物・遺構全く見られない。
- 11月9日(火) くもりのちはれ 2区の13地点清掃・実測・写真終了。3区に入る。沢を掘ると水が湧き出す。湧水の地点から2cm大の土師器細片が黒色土中から出土する。この分だと付近に遺跡があると考えられるため、奥の日当たりの良い平坦地に入る。ここを4区として試掘坑を入れる。土坑状の落ち込みがあり、グリッドを拡張する。掘下げてみると浅くて不安定な土坑となる。検討した結果、木の根の痕跡であろうという結論に達する。
- 11月10日(水) はれ 本日は陽ざしが強くあたたかい。4区は赤色の強いローム層や頂上は砂層であったり変化に富んだ地層で、ローム層中に木の根の痕跡や木が倒れた跡とおもわれる黒色の落ち込みが4地点確認された。4区は3時で終り、次の調査地を踏査に行き明日の行程を決める。
- 11月11日(木) 雨のちくもり 5区的最東端にトレンチを入れることになり山道を移動する。水落観音に近い方なので9時30分に現場に着く。トレンチを入れると雨が降り出

す。桑畑の跡を掘り下へと移る。昔はこんな山の中までも開墾して生活していたのかとおもうとその労力の大変なことに頭が下がる。本日も額がゴツゴツになるほどブヨにさされる。しとしと雨が降りつづき実測・写真が困難になり午前で終了する。午後図面整理。

○11月12日（金）はれ 本日はあたたかく晴れているので仕事もはかどる。6区昨日の続きへトレンチを入れて7区へ移る。尾根は若い森林腐植土でその堆積も浅い。反面沢に入ると水が湧いてきてトレンチに入れなくなる。

12時20分で山頂のトレンチによる試掘を終り、芦内遺跡沿いの下段へ下る。

○11月13日（土）くもり時々雨 調査地点の地図およびトレンチ図面整理。終了地点の地図を新たに作る。副団長・事務局へ届ける。

○11月15日（月）はれ 本日は、大奈良の加藤一夫氏が見える。戦前自分の畑で出土したという骨の入った土器がまだ埋れているかもしれないから立合いたいとの申し出があり、加藤氏の畑を掘り下げてみるが、水が湧き出してきて土器の出土は認められなかった。加藤氏のお話では、昔、この一帯は水田だったとのことである。

○11月16日（火）先日、溝のような落ち込みの認められたトレンチの掘り下げに入る。先ず部分的に土層観察のためのトレンチ掘りを行なう。上方部は浅く下部は深くなる。中心部を掘り下げるとトレンチ中央に15cm大の礫があり、その周囲に大小の小石がある。その際に黒曜石の剥片が出土する。想定した通り縄文時代の溝であることが判明する。そのため溝は全面掘り下げてみることにする。

昨日に引き続きトレンチの清掃を行なうグループと2班に分れて作業をする。

○11月17日（水）はれ トレンチ清掃および溝の掘り下げを行なう。写真まで終了する。

手の空いた人は、木が密集していてバックホーの入れなかった地点に手掘りのトレンチを入れる。湧水の豊富な8区隣接地の微高地から土師器口辺が出土する。また、芦内遺跡の大塚さんの農園からも内面黒色の細片が出土し、初めてここが奈良～平安時代も加わった縄文時代との複合遺跡であることが分かる。

○11月18日（木）くもり 溝の実測を行なう。試掘坑トレンチの実測、写真。10区のトレンチ内に土坑状の落ち込みが2箇所あったため掘り下げる。その内の1基は石が埋っていて土坑墓の様相が伺える。

○11月19日（金） 本日から10区内の手掘りを本格的に行なう。芦内遺跡周辺が地形、湧水の関係から出土するのではと焦点をしぼって、日当たりの良い微高地を選んで各自トレンチを定めて掘り下げる。土師器・須恵器・打製石鍬が腐植土直下から出土する。遺溝の存在は皆無であった。

夕方、山際の段丘上に直径15cmの深い穴が見つかる。2mのポールを入れると、

すっぱり入ってしまい、棒を継ぎ足して測ると320cmの深さとなり驚く。穴は空洞であった。木の跡としては深すぎる。ゴルフ場開発のボーリングであろう。

- 11月20日(土) くもりのち雨 本日も各自分散し、木が密集してバックホーの入れなかった場所を選定して手掘りを行なう。8区北西端の日当りのよい斜面を掘っていた有井氏が土器が出土するので見てほしいと言うので行って見ると、落込みが認められどうやら住居址のど真中にあたったようである。10時から雨が降り出すが12時まで作業を続行する。午後は道具を洗う。
- 11月22日(月) はれ 有井氏は一昨日発見した住居址上面の腐植土の削平を行なう。残りの者は周辺に遺溝があるかどうかトレンチ掘りを行なう。しかし、遺構は認められなかった。
- 11月23日(火) はれ 本日は団長に来ていただいて今までの調査結果について検討会議を行なう。確認した住居址はこの際掘り下げる事に決定する。
- 11月27日(土) くもり 3～4区の木が密集していて重機の入らなかった部分に各自トレンチを入れて手掘り作業を行なうが、遺物は出土しなかった。
- 11月28日(日) くもり 地図書き入れ、図面・出勤簿の整理。
- 11月29日(月) はれ 先日発見した住居址の掘り下げに入る。プラン確認のため残りの表土を削平する。木が密集しているため根がはっていて作業がやりにくく、はっきりしたプランがつかめず仕方なくトレンチ掘りに入る。斜面に作られている住居址で深さも一定ではなく特殊な構造である。北側の焼土付近から鉄滓が出土する。製鉄に関連した住居址と考えられる。セクションをとりベルトをはずす。
- 11月30日(火) はれ 床面と壁を出す。壁際は固く心配していたよりも容易に壁を確認することができた。しかし、木の根のある部分の壁はあまりはっきりしなかった。焼土は北側の壁上面に集中し、その周囲から土器がまとまって出土した。午前でどうやら仕上げ、午後から床面、ピットの精査に入る。北東側はベッド状で作業のための仮小屋のような様相を呈していた。写真撮影の後実測を行なう。その後、埋めもどしを行なって作業を終了するが、手掘りのみの作業はしんどい。
- 1月～3月 図面整理、遺物実測、トレース、原稿執筆、編集、写真図版、印刷入れる。校正、報告書発刊。

(島田 恵子)



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 考古学的環境

芦内地区の開発計画地は、北方を佐久市と境を接した山麓地に所在し、西側に芦内遺跡が細長く入り込んでいる。1の芦内遺跡は、江戸時代末期廃藩置県の時、職にあふれた武士が水田開発のために入植して水田を切り開き、昭和初年まで一帯は水田だったとの事である。そのため表面採集では黒曜石の剥片が認められるだけで、縄文時代の遺跡であるということが分るのみであった。しかし、今回の試掘調査によって新たに平安時代の遺跡と複合し、その範囲がさらに周辺に拡大していることが判明した。

2の芦内岩陰遺跡は、昭和39年「県内洞穴遺跡の研究」で長野県学校科学教育奨励金をうけて、長野県考古学会員の樋口昇一・藤沢平治氏が調査を実施している。縄文前期、弥生時代後期に比定される土器・石器が出土した。岩陰は、開口部1.75m、奥行2.5m、高さ2.4m、テラスは開口部を中心に東西5mの規模である。

芦内から清川の地区に入ると弥生時代～平安時代まで複合する清川入遺跡があり、その北方に清川古墳が所在している。清川の部落に入ると縄文と平安時代の清川遺跡があり、さらに各々の沢には、はかせ久保・金原・吉沢堤下遺跡が分布している。共に平安時代の遺跡であるが、金原が弥生時代と吉沢堤下が古墳時代と重なる複合遺跡である。No.11の芝添遺跡も清川に属しており、この遺跡からは藤内式土器・曾利式土器が出土している。縄文時代中期の最盛期から後半にあたる。

大奈良に入ると、9の脇平山遺跡があり、丘陵状の台地には縄文時代～平安時代まで連続する複合遺跡が展開している。圃場整備されて水田の中には中反田遺跡があり、工事中に古墳～平安時代の遺物が出土した。また、大奈良の部落全体が大奈良遺跡で、庭や畑を掘ると必ず遺物が出土するといわれている。脇平山と同様に縄文～平安時代までの連続した時代の複合遺跡である。さらに13の山崎遺跡が古墳1基を含めて、弥生～平安時代まで複合している。

田口字原に所在する原遺跡は15万㎡の大遺跡で、幸神古墳群（6基）、外九間古墳群（3基）中原古墳群（3基）等合計12基の古墳を含んでいる。弥生～平安時代までの複合遺跡とされていたが、昭和63年に農道拡幅工事のため発掘調査を実施し、弥生時代後期後半の住居址3軒、古墳時代末～奈良時代にかけての住居址2軒、奈良時代4軒、平安時代2軒の住居址を検出した。小範囲の調査ではあったが住居址は濃い分布を示し、相当大きな集落が存在している可能性がある。少量ではあるが縄文時代後期の遺物も出土した。

田口下町に入ると、15～20までの6遺跡が密集している。割塚・明法寺・五庵、神原道場遺跡



1 図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
1	芦内	清川 高戸ヤ		○					
2	芦内岩陰	清川 芦内	山腹	○	○				昭和39年発掘調査
3	清川入	清川 清川入	〃		○	○	○		
4	清川入古墳	清川 清川入	〃			○			
5	清川	清川 部落入	〃	○			○		
6	はかせ久保	清川 はかせ久保	〃				○		
7	金原	清川 金入	〃		○		○		
8	吉沢堤下	清川 吉沢堤下	〃			○	○		
9	脇平山	大奈良 脇	微高地	○	○	○	○		
10	中反田	大奈良 中反田	平地			○	○		堀内重雄氏圃場整備のとき出土
11	芝添	清川 芝添	〃	○					
12	大奈良	大奈良 金石	微高地	○	○	○	○		
13	山崎	大奈良 山崎	〃		○	○	○		山崎古墳を含む
14	原	原幸神 切合 中原 外九間	平地		○	○	○		幸神、外九間、中原、古墳を含む
15	割塚	田口下町 割塚	〃		○	○	○		割塚古墳を含む
16	明法寺	田口下町 明法寺	〃	○	○	○	○		明法寺古墳を含む
17	五庵	田口下町 五庵	〃	○		○	○		五庵古墳を含む
18	龍岡城跡	田口下町 龍岡	〃						近世
19	田口城跡	田口下町 城山	丘陵					○	
20	神原道場	下町 中町 下神原	山麓	○	○	○	○		
21	英田地畑	宮代 英田地畑	〃			○	○	○	英田地畑1・2号古墳含む
22	新海神社西御陵古墳	宮代 英田地畑	〃			○			
23	新海神社中御陵古墳	宮代 宮の沢	〃			○			
24	新海神社東御陵古墳	宮代 宮の沢	〃			○			
25	上宮代1号古墳	宮代 上宮代	平地			○			
26	上宮代2号古墳	宮代 上宮代	〃			○			
27	宮東	宮代 宮東	台地	○		○	○		平成4年一部発掘調査
28	大工原	宮代 上ノ平	〃			○	○	○	〃
29	明躰	宮代 明躰	山麓	○		○	○		

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
30	山口	河原宿 岩淵 山口	山麓	○		○	○		
31	日向大工原	宮代 日向大工原	〃			○	○		
32	丸山下	丸山 東大工原	平地			○	○		
33	丸山上	丸山 四ノ久保	山麓			○	○		
34	影丸山	丸山 田ノ上 水落	〃				○		
35	三分	三分 塚畑谷地 芝高北千塚	台地	○		○	○		
36	遍照寺	三分 寺久保	山麓		○	○		○	
37	西塚田	三分 西塚田	平地			○	○		
38	田中	三分 中川原	〃	○	○	○	○		
39	戸井口	三分 上川原 中川原	〃	○	○	○	○		
40	井上	三分 上の田	〃	○	○	○	○		昭和48年一部発掘調査
41	荒巻	三分 荒巻	〃		○	○	○	○	
42	岩崎砦城跡	三分 荒巻	丘陵					○	
43	小山沢	三分 小山沢	山麓	○					
44	山際	入沢 山際	〃		○	○	○	○	山際1号古墳含む
45	山際2号古墳	入沢 上大深	〃			○			
46	山際3号古墳	入沢 上大深	〃			○			

があり、共に古墳を含む。割塚遺跡は弥生時代から平安時代までの複合遺跡であるが、明法寺、神原道場遺跡は、縄文時代～平安時代まで連続する遺跡である。五庵遺跡は、弥生時代が空白である。

また、田口下町には江戸時代末期の慶応2年龍岡藩主松平乗謨が築城した西洋式城郭の龍岡城跡がある。広さ3ヘクタールを有し、五角形の稜堡塁で切石積、両面を除いて水壕をめぐるしている。国の史跡に指定されているが、建物は御台所が残っているだけである。その他城内に明治元年戊辰の役に戦死した龍岡藩士を祭るために創建した招魂社がある。

中世の山城田口城跡は、東南西側に高い岩の断崖がめぐる尾根の先端に築かれ、連郭式の構造で本郭、二の郭、三の郭、堀切、段曲輪が現在もしっかり残っている。また、山坂にもかかわらず、水が豊富なため、井戸跡もかなり残っている。さらに武士団の屋敷跡と考えられる広大な平坦地があり、水の豊富なことから居住していたと考えられる。田口氏滅亡後、依田能登が城主となったが、依田信蕃に攻められ、天正11年2月城を捨てて上州に走った。南佐久郡下では一番大きな山城で佐久平全域を一望できる。分布図42は岩崎砦城跡である。現在遺構として認められるものは残っていないが、文献史料から徳川方の津金衆が北条方と戦った時に陣を

置いたことが伺える。

宮代地区に入ると古墳7基と5遺跡が密集している。まず、新海神社の西側に英田地畑遺跡があり、遺跡内に古墳2基が存在していたが、昭和40年にその内の1号古墳が調査終了後に削平され畑地となってしまった。円墳、横穴式石室で、玄室東西1m、南北2mを測り、玄室内からは、蕨手刀1、直刀1、鉄鏃10、銅製品4、三輪玉2、土師、須恵器、人骨が出土した。蕨手刀は国立博物館に所蔵されているが、長野県下では10例程の出土しかなく貴重なものである。また、新海神社西方の山麓南傾斜面に新海神社西御陵、中御陵、東御陵の3基の古墳が存在している。3基共に円墳で横穴式石室の構造を有す一般的な古墳であるが、御陵と称している点が注目され、いわれを明らかにしていかなければならない。今後の課題である。

次いで、上宮代1号、2号古墳が宮代の集落内にあるが、2号古墳は住宅建設の際墳丘がとり去られ現在五輪塔が1基置かれている。

新海神社の東南側には、宮東・大工原・明鉢・日向大工原遺跡が続いている。この内、宮東明鉢遺跡が縄文、古墳～平安時代の複合遺跡で、大工原遺跡は古墳～中世まで連続した複合遺跡である。日向大工原遺跡は古墳～平安時代のみとなる。この内、平成5年臼田町土地開発公社の住宅地造成計画に先立ち、宮東遺跡、大工原遺跡の一部を発掘調査した。平安時代中期の住居址8軒、縄文時代中期後半の土坑墓1基を検出し、新海神社の歴史を解明する上で大きな示唆を与えてくれた。出土遺物の中でとりわけ注目されたのは、小鍛冶に関わるふいごの羽口、鉄滓、スラグと共に鉄鎌・鉋・刀子・鉄鐸などの鉄器、小鍛冶の施設が発見されている。

丸山に入ると、丸山下、丸山上、影丸山遺跡が所在し、影丸山遺跡が平安時代のみで丸山下、丸山上は古墳～平安時代に複合する。No.30の山口遺跡は縄文中～後期、古墳～平安時代までの大遺跡で、最近、縄文中期後半の貴重な資料、三角埴土製品が発見されている。

遺跡の分布を三分に移すと、三分・遍照寺・西塚田・田中・戸井口・井上・荒巻・小山沢の8遺跡が分布している。この一帯は、縄文時代～平安時代まで連続して集落が営まれている。特に、弥生時代の千曲川右岸の稲作の南限にあたる地域で、ここから先は弥生の大集落は存在していない。佐久町～小海町まで小さな集落が想定されるのみで遺跡は減少する。また、田中遺跡から弥生時代の穂摘具である石包丁が出土している。この内井上遺跡は、昭和48年圃場整備中に住居址が発見されたため緊急発掘調査が実施され、大遺跡の中でのほんの一部分の調査ではあったが、古墳時代の住居址4軒、土坑4基、溝状遺構1基を調査し、臼田町の歴史解明に大きな成果を上げることができた。

三分と入沢の境には、山際1号古墳～3号古墳が群集している。円墳、横穴式石室の構造で他の群集墳と変わりはない。この内、2号古墳は青沼小学校に移転復元されている。山際遺跡は弥生時代～中世まで連続した複合遺跡である。

以上が芦内地区周辺の考古学的環境である。



第2図 開発地試験区全体図 (1:16,000)

### 第3章 調査状況

#### 第1節 調査方法・基本層序

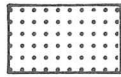
試掘調査は、開発地域を事前に踏査して遺跡の存在が予想される区域を設定した。さらに調査に入った日に再び踏査を行ない抜けている地点を補充し、合計10地点に調査区を定めた。

調査の方法は、日当たりの良い南西傾面、平坦地を選んで50mおきに2×2mのトレンチを入れる予定であったが、いざ現地に入るとからまつ林、松林、雑木などが生い茂り、これらの木を傷つけないようにとの注意が地主さんからあったため当初の計画通りにはいかなかった。そのため木のない空間に2mのトレンチを入れ、さらに、遺物の散布が認められた地区は1m内外の小さなトレンチを手掘り作業でこまめに入れた。

基本層序は、森林腐植土の堆積した表土層とその下部はローム層が厚く堆積し、地形によってローム層の色調、スコリアの混入、湿地帯での粘土、砂礫層、腐植土の厚い堆積とそれぞれ異なった層序が観察された。以下地区毎に順を追って状況を示した。

#### 第2節 地区別遺跡の範囲確認と出土遺物

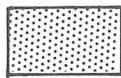
##### 層序凡例



暗褐色土  
(森林腐植土濃い)



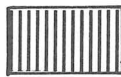
茶褐色土  
(赤色強い)



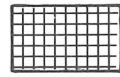
明褐色土  
(森林腐植土うすい)



黄褐色土



黒色土



灰色土  
(灰色粘土)



黒褐色土



燈色  
(礫風化層)



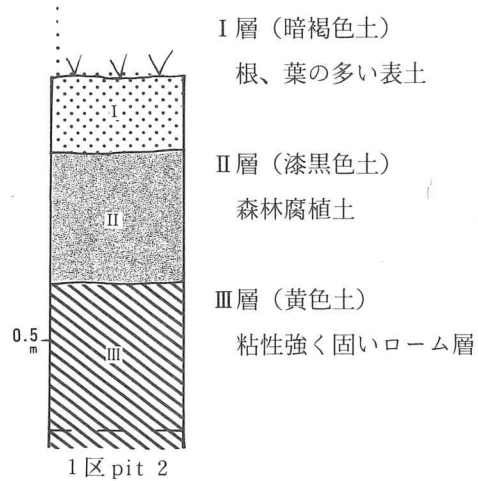
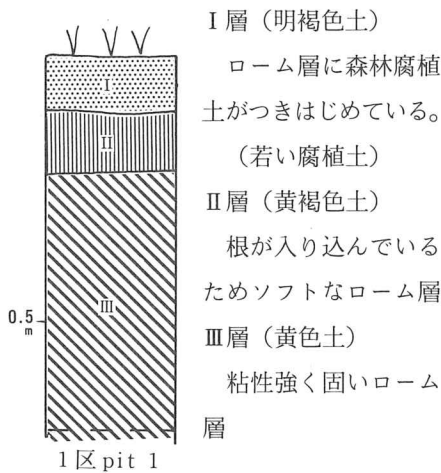
漆黒色土



黄色土  
(ローム層)

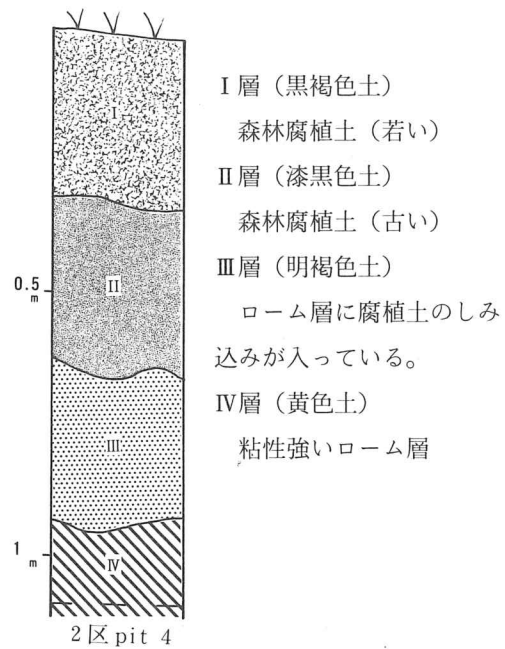
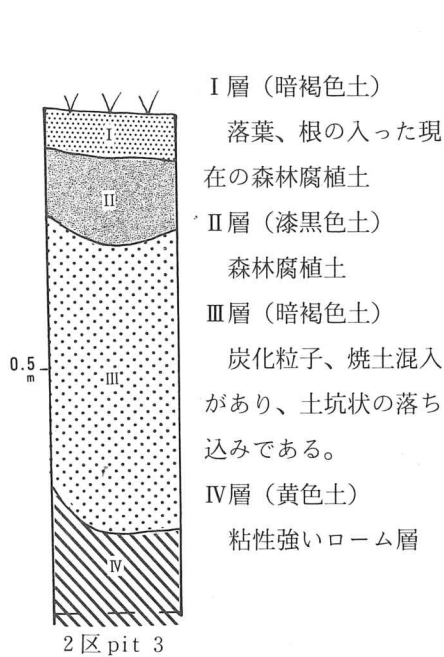
1 区

道路に沿った南西側の尾根にあたるため日当たりが良い。標高は1,000~1,100m内に入る。表土の森林腐植土は頂上のためか堆積うすく若い。遺構、遺物の出土はなかった。



2 区

2区は、1区北側の道路下に位置した緩傾斜面の広い区域で、西陽があたり地形的には北風をさえ切る静かなたたずまいの場所である。標高は980m~1,020m内を測る。



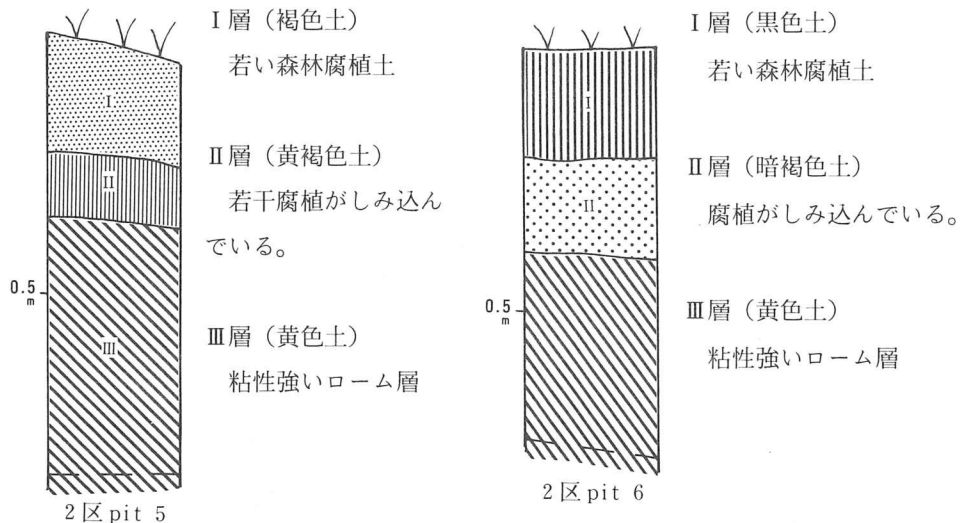


Pit 3 は、炭化粒子、焼土が混入した土坑状の落ち込みで、直径 1 m、深さ 55 cm を測る。上面 25 cm まで森林腐植土に覆われプランはその下部から確認できる。覆土は暗褐色を呈し、人為的様相が伺える。なんらかの遺構であることが観察された。

Pit 4 は傾面の最下部であるため上部からの流れ込みがあるためか、森林腐植土の堆積が 65 cm と厚くなる。

Pit 5・6 は比較的高い地点の層で、若い森林腐植土が 2 層にわたって 40 cm 内に堆積している。

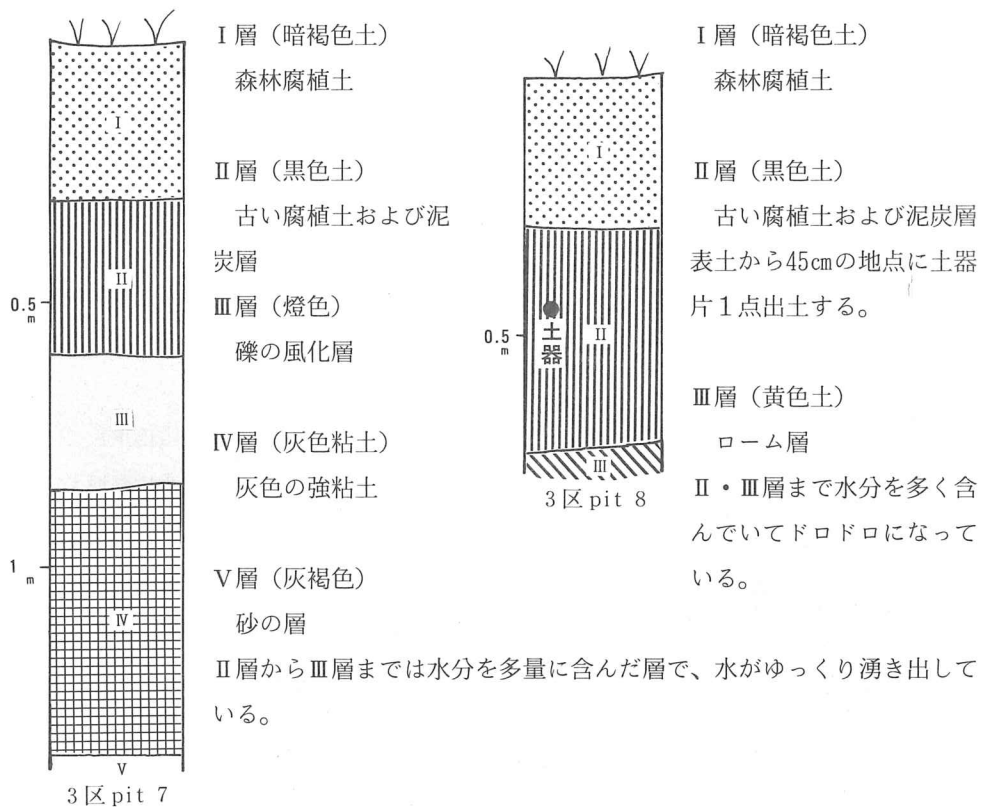
2 区はこのような層位からみて、縄文人や奈良～平安人にとっては生活領域内の一部であったと考えられる。



### 3 区

3 区は沢であるが、道路からみると沢筋に添って平坦面があり、サワラの木が青々としていたため、4 地点にトレンチを入れると水がジブジブと静かに湧き出している土層で、全体に水分を多量に含んでいた。標高は 1,000 m ~ 1,100 m を測る。

Pit 7、8 共に I 層は現在の森林腐植土で暗褐色を呈していた。II 層も共に黒色土で古い森林腐植土である。Pit 7 の III 層は燈色で礫が風化しつつあるところまで固まっている部分が見られる。IV 層は灰色粘土層で V 層は砂層であった。かなり変化に富んだ層位であるといえる。この Pit 7 から 20 m 上部に位置している Pit 8 は、I・II 層共に Pit 7 と同様の層位であるが、III 層は、ローム層となる。表土から 45 cm の黒色土中に土師器の細片 1 点が出土した。水が湧き出しはじめた地点にあたり、水辺を利用した人々の痕跡を示すものである。周囲に集落の可能性が考えられる。



#### 4区

4区は、3区に続く沢の中心に山道があり、その両側の平坦地14地点にトレンチを入れた。範囲が広がったためかなり変化に富んだ層位が認められた。

3区の水辺付近から土器が出土したため。付近に集落の可能性が考えられたので詳細に調査したが、遺構、遺物の検出は認められなかった。

Pit 9は4区の入りにあたり最下部であるため、70cmの腐植土に覆われていた。またIV層のローム層中には5~10cm大の礫が認められた。

Pit10は、北西側の平坦地にトレンチを入れたところ、表土から1.8mのところようやくローム層が認められた。I・II層は森林黒色土で65cmの厚さに堆積し、III層は赤味の強いローム層で茶褐色を呈している。IV層は90cmの厚さにわたる黒褐色土でIII層の赤味の強いローム層と炭化粒子を混入していた。

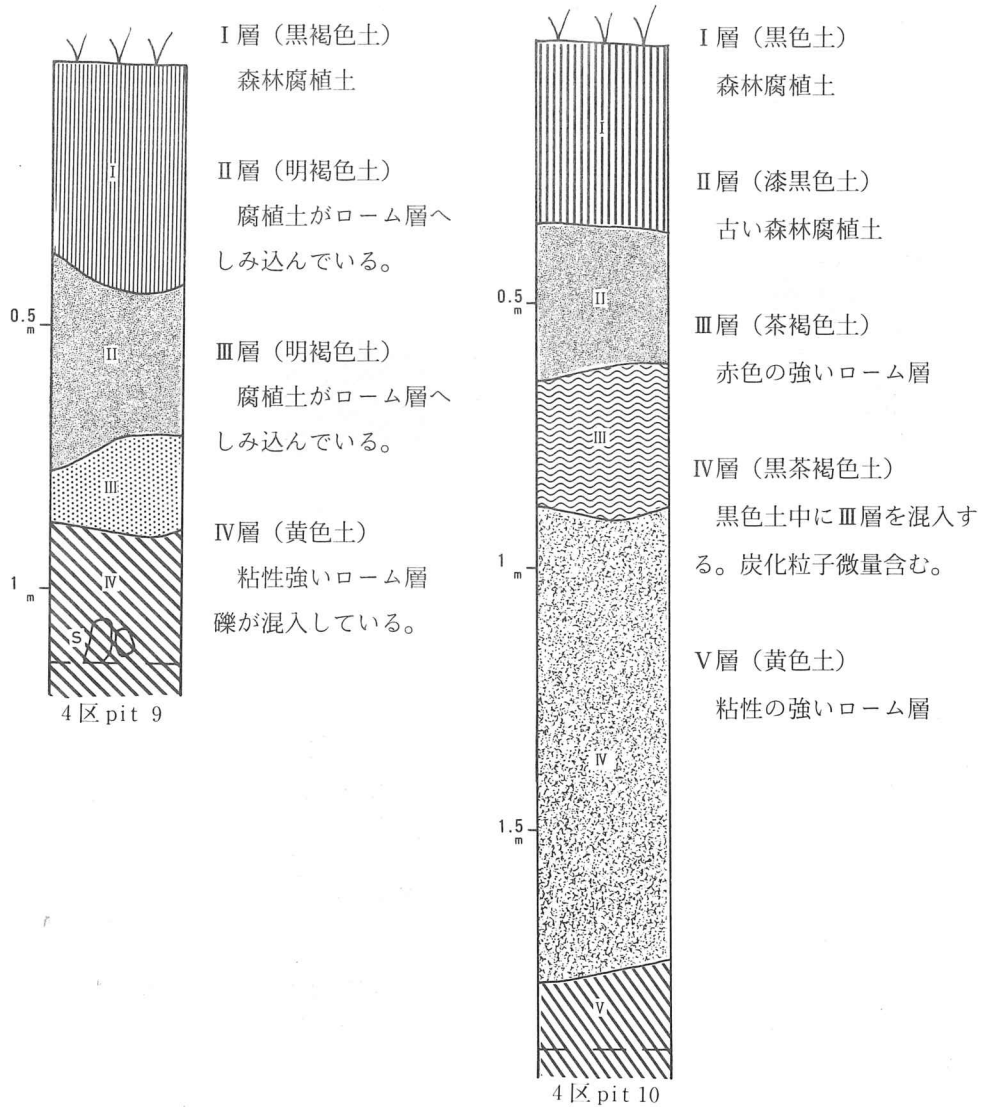
Pit11は、I~IV層の腐植土の間に赤味の強い茶褐色土が帯状に混入している。さらに、漆黒土のIV層の壁面には木の倒れた痕跡と考えられる落ち込みが認められた。古い時代のものである。

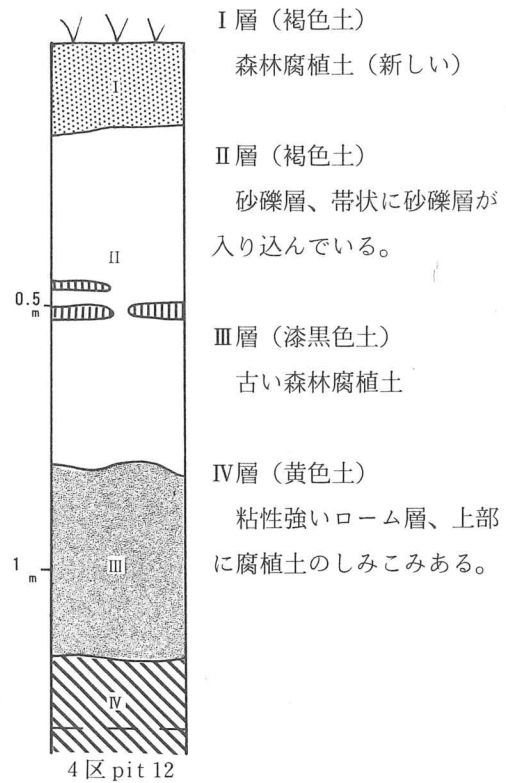
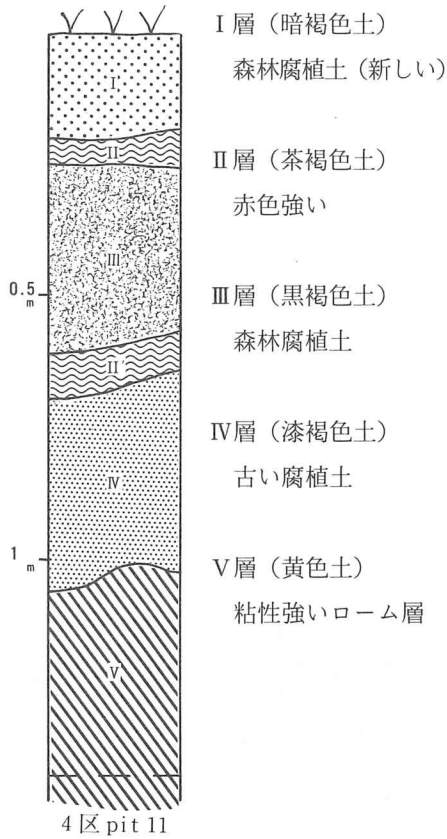
Pit12は、標高1,040mを測る4区的最上部にあたるため、森林腐植土は20cmの堆積

で浅く若い。II層は褐色を呈した砂礫層で層厚65cmを測り、中間に帯状に途切れた黒色土が入り込んでいる。

III層は、漆黒色土で古い森林腐植土である。そのため、I～II層は、標高1,050mの頂上付近から流れ込んで覆いかぶさった土層であると考えられる。このIII層から下部に木の根の入り込んだ幅45cmの落ち込みが認められた。

4区は、古い森林腐植土の下に木の根、木の倒れた痕跡を示す漆黒色土の落ち込みが4箇所グリッドに検出された。10,000年前後のものであるとおもわれる。





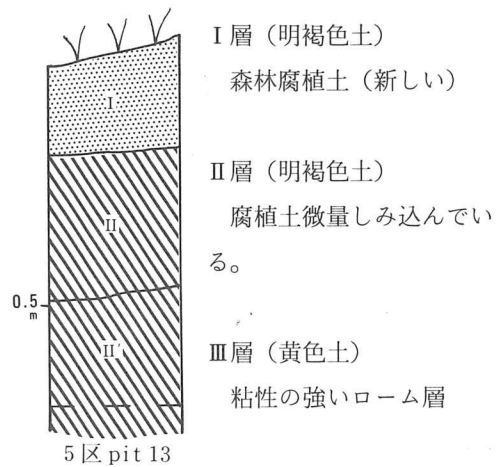
5区

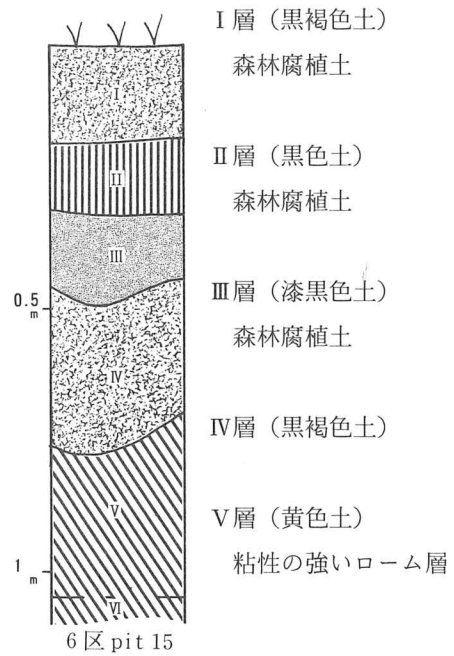
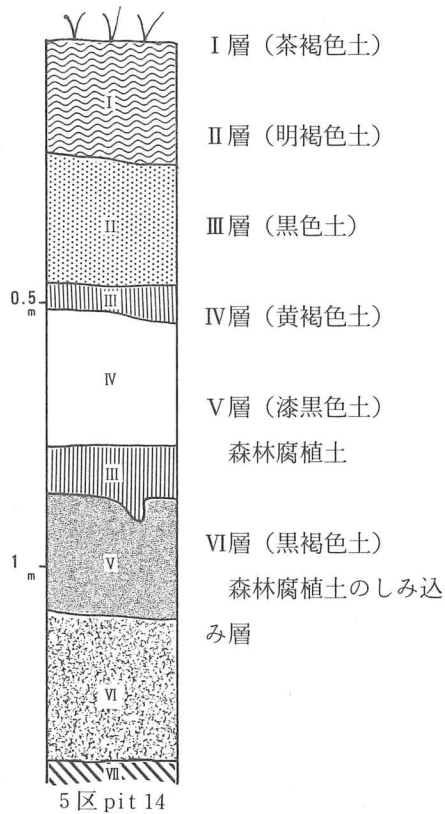
5区は、水落観音へ通じる開発区  
の東端側に位置し、標高は1,070m  
~1,100mを測り最高地点にあたる。

この地帯のなだらかな斜面に桑畑  
の跡があったり、区有林の一部分に  
日当たりの良い平坦地があったため  
遺跡の存在が想定されたので、6箇  
所にトレンチを入れ、さらに、手掘  
りの小Pitを入れた。

しかし、遺構の存在、遺物の出土  
は皆無であった。

Pit14は道路下に位置していたた  
め、道路新設工事の際上面に土をかぶせた様相が層位から観察される。





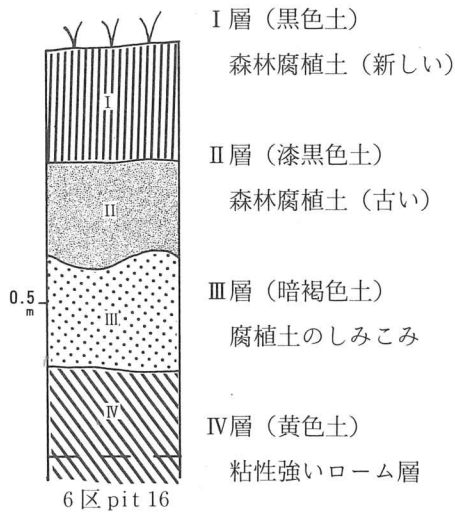
6区

6区は、標高1,050~1,060mを測り山の尾根に位置している。道路を中心とした北東側と南西側にトレンチを入れた。

Pit15は、斜面にあたるため層厚75cmにわたって森林腐植土が堆積していた。

反面、尾根に近いPit16の森林腐植土は層厚40cmを測り浅くなる。

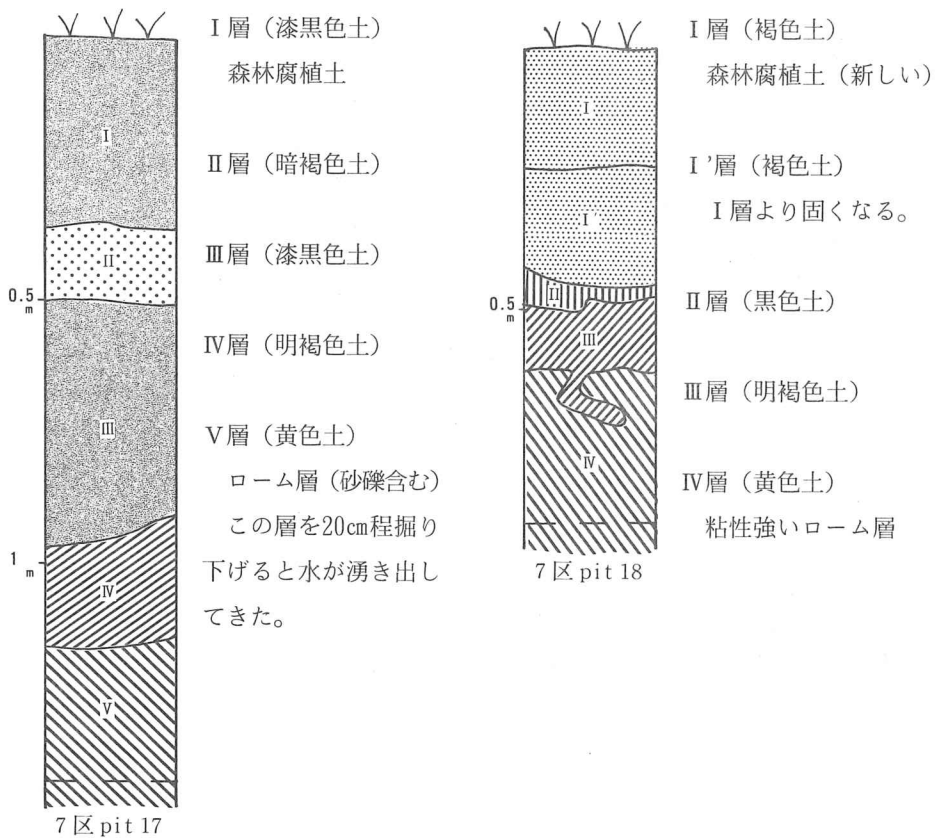
比較的平坦部を選定して調査を試みたが、やはり標高が高く尾根上に位置している関係から生活の跡はみられない。



7区

7区は、6区と隣接した尾根上に位置しており、道路をはさんだ南北側にトレンチを入れた。Pit17は、北側の西斜面の断面である。森林腐植土が層厚95cmにわたって厚く堆積し、140cmの深さまで掘り下げると水が湧いてきた。尾根から20m下がった地点を掘ると1.4m程で水が湧くということは、かなり地下水の豊富な山であるとおもわれる。

Pit18は、尾根に近い付近の断面である。森林腐植土は褐色を呈し45cmの層厚を示している。この状態からみて新しい腐植土であることが理解できる。II層は黒色土の古い腐植土であるが、層厚6cmと浅い。遺構、遺物の存在は認められなかった。



8区

8区～10区は、1区～7区とは異なり地形的に一段下がった山裾にあたる。さらに、芦内遺跡と接しているため遺跡の広がり当初から予想された。そのため、試掘Pitは、ローム層直下で止めることを前提にトレンチの掘り下げを行なった。

8区南東側は、湧水の水源付近にあたるため、漆黒色を呈した腐植土が1mの深さ

で堆積し、ローム層直上から水が湧いてくる状況にあった。江戸時代はここから水を引いて芦内遺跡一帯に水田を開発したとの事であり、水路の一部が現在も残っている。

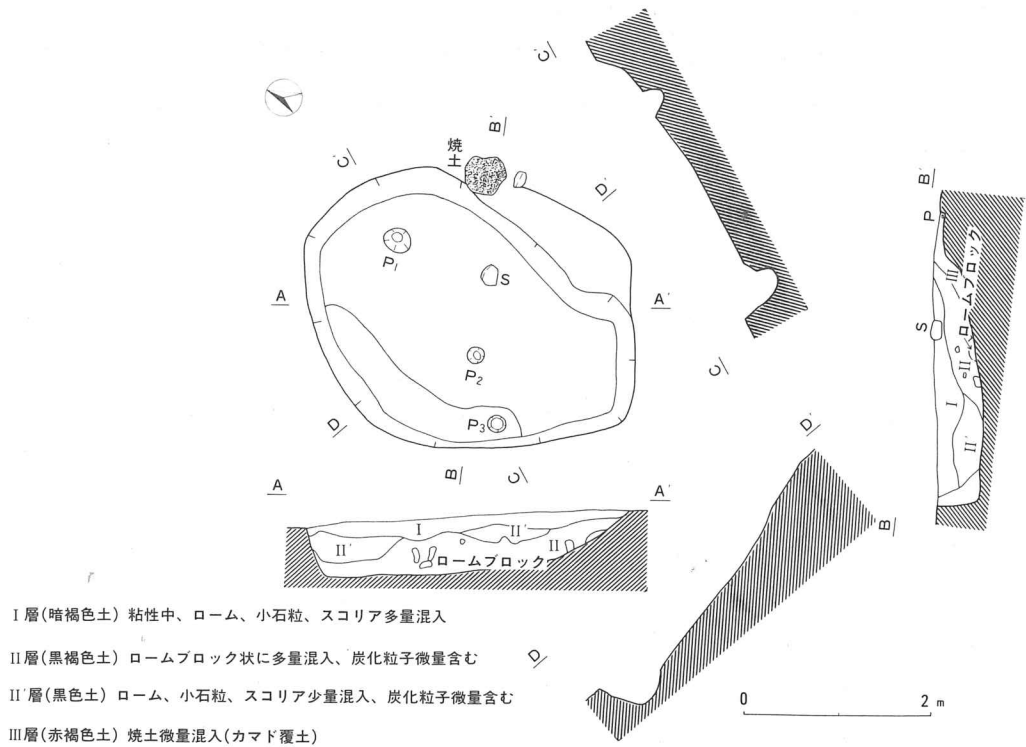
また、8区北西端に手掘りの小Pit（1m内外）を各所に入れると、その内の一つが住居址の真ん中あたり遺構の検出ができたため、芦内遺跡の時期や集落のあり方を知るために住居址の掘り下げを行なった。

## 1 住居址

### 遺 構 （第3図）

住居址は8区から発見された。日当たりのよい緩傾斜面に手掘りでトレンチを入れ、表土を30cm程掘り下げると土器片が2～3点出土した。そのため周囲を拡張して住居址の存在を確認することにして表土を削平してみると、腐植土の下は暗褐色土が一面を覆っていて遺構の覆土であることが判明し、さらに焼土の散布も認められた。

調査団では住居址についての対策会議を開いた。その結果そのまま放置しないで、周辺にも広がっている遺跡の性格を知る意味においても、一軒は掘り下げてみるべきであるとの結論に



第3図 8区検出住居址実測図（1:60）

達した。

住居址は、従来の芦内遺跡に隣接した8区の西北端の斜面に検出された。周囲はからまつ林であるため住居址の壁に沿って3本のからまつがあり、プラン確認および掘り下げにも根が張り出していて困難であった。

平面プランは、南北290cm、東西370cmを測り、東側に段を呈した不整な楕円形を呈する。壁高は、地形の関係から出入口部であると考えられる西側が最も深く45cmを測る。この部分には壁下に幅45cm、長さ250cmの落ち込みがある。いずれかの機能があったと考えられる。南壁は25cm、北壁30cmで、東壁は15cmで壁がなだらかに立ち上り、約30~50cmの幅にわたって段が設けられている。いわゆるベッド状ともいふべき特殊な遺構である。

覆土は4層に分かれ、中間に堆積しているⅡ層とⅡ'層は黒色が強く、Ⅱ層はロームブロックを多量に含んでいた。周囲の土層は粘性が強いが遺構覆土のみ粘性は弱まり作業もはかどった。

床面は、地形的な関係から西側に傾いている。さらに西壁下に床面から10~15cm掘り込んだ施設があるため傾斜をさらに強くしている。この施設は傾斜に対して何らかの機能を果たしていると考えられる。床はところどころ堅緻な面がみられ、特に東壁側が固かった。

柱穴は、3個認められたが配置が不規則で不安定である。P<sub>1</sub>は径25×30cmを測り柱穴らしい掘り込みを示している。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は径20cm、深さ10cmと貧弱である。

カマドは、東側に焼土が堆積しカマド跡であることをプラン確認時から予想していた。掘り下げてみると石は取り除かれ、カマド脇および住居址内に赤色化した石が散乱していた。運悪くからまつがあり、木の根を切りながらギリギリまでカマドの検出につとめたが、住居址廃絶時に壊しているため詳細は不明である。

#### 遺物(第4・5図)

遺物は、打製石鋸1点が住居址覆土上面から出土した。

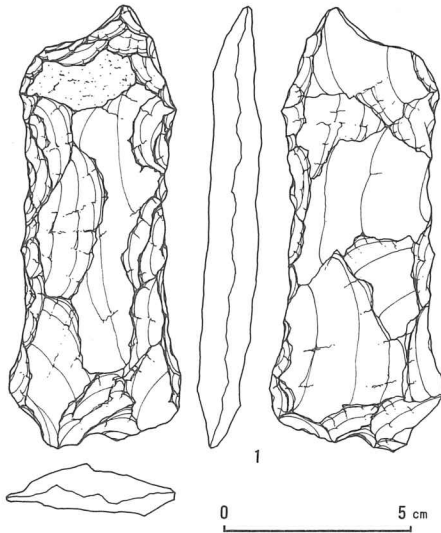
1は、玄武岩製の打製石鋸で、最大器長11.8cm、最大幅4.6cm、最大器厚1.5cmの短冊形を呈する。調整は浅い階段状剥離が多用されている。現状は刃部と頭部を僅かに欠損する。芦内遺跡は縄文時代と重複し、遺跡の範囲はこの地点まで広がっているため遺物の混入がみられると考えられる。

遺物は主にカマドの焼土が散布している周辺から出土している。土師器坏口縁部10点、胴部4点、灰釉陶器1点、甕口縁部3点、胴部20点、底部1点、鉄滓1点がすべてである。この内図示できたのは、甕口縁部1点、埴1点、坏2点がある。

甕は、口径18cmを測り、頸部「く」の字状に外反し、器厚が厚い。調整の内面は横ナデが施され器肌はなめらかであるが、正面頸部は指押さえの痕跡があったりかなり雑である。

2は埴で、口径16.5cmを測ると推定される。台の部分に欠損しているが器高は7.5cm内外であ





第4図 住居址出土石鍬実測図(1:2)

る。内面に十文字の暗文が施されているが、内面は黒色ではない。なめらかに調整されている。

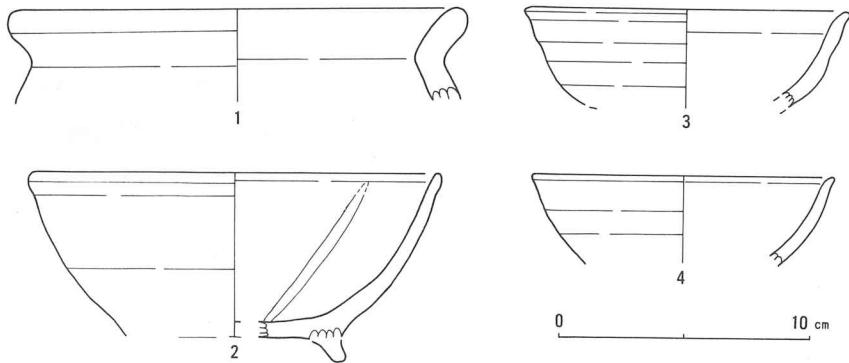
3は内面黒色の坏で、口径12.8cmを測る。正面はロクロ痕が残る。全体に荒い調整である。

4は、器厚のうすい坏口縁部で、口径12cmを測る。調整は内面は磨かれ、正面ロクロ痕が残る。

さらに、図版七に示した鉄滓が出土している。これは磁鉄鉱から鉄を製錬したあとの鉄滓で、鉄となった玉はがねを取り除いたものである。

以上が本住居址出土の遺物である。出土土器からみて本住居址は平安時代中期に比定されよう。

また、鉄滓の出土、住居址の特殊な構造から製鉄技術に関わる住居址であった可能性が考えられる。



第5図 住居址出土土器実測図(1:3)

### 9区

9区は全体に西側に緩傾斜した平坦地である。西陽が強く住居址の存在が想定された。表土を20~30cm掘り下げるとローム層が認められた。三本のトレンチを入れたが落ち込みは確認できなかった。しかし、図版八に示した土師器1点が出土している。付近に住居址が存在しているか、または、芦内遺跡に住んだ人々の生活領域であったとおもわれる。

### 10区

10区は芦内遺跡に接した区域にあたるため、遺構、遺物の出土が予想されたので、トレンチを18本入れた。さらに、木が密集していて重機によるトレンチ掘りができなかった場所へは、手掘りによる1m内外のトレンチをたくさん入れた。この地区も8

～9区と同様、表土層20～30cmを掘り下げたのみで慎重な精査を行なった。

結果、トレンチ内に溝、土坑を検出し、遺物は、石鏃、石鏃破片、須恵器、土師器、黒曜石剥片が出土した。

## 2 溝

本遺構は、10区東端側に検出した。2m×2mのトレンチを入れたところ全面黒色土の落ち込みが認められたため、拡張した結果、幅70×140cmを測る溝が続いていることが分かり、確認した9mを掘り下げることとした。

溝は、南側に一段上った日当たりの良い山裾沿いに位置している。道をへだてた北側は芦内遺跡が続いている。その南側山裾から溝の流れがはじまり西側へと流路をとっている。先ず、流れのはじまる土堤際は、幅130cm、深さ28cmを測るが土堤から流れ落ちている部分は、底面から約1m上部にあたる。この上面から水がしたたり落ちて溝が自然に作られたのである。上部は浅く、調査した最下部は深さ65cmと下るにしたがって深くなる。

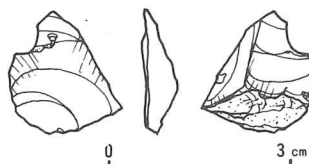
覆土は、確認面の層は黒色の強い腐植土であったためプランは容易に把握することができた。Ⅱ・Ⅲ層は、ローム粒子の混入が多く褐色土を基調としている。Ⅳ層・Ⅴ層は下流に堆積している層で、Ⅲ層は三角堆土で黒色が強くなる。Ⅴ層はロームがブロック状に混入していた。

また、溝中間点には60cm×50cm、深さ20cmの落ち込みがあり、中央に15cm大の礫が2個配石され、その際から図に示した黒曜石剥片が出土した。剥片は最大長2cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cm。石質は良質な和田峠系のものである。

本遺構は、黒曜石剥片が配石した様相を示している礫の際から出土したことにより、縄文時代に大雨などによって自然発生した溝である可能性が考えられる。

## 3 土坑

本土坑は、10区西南端側のトレンチ内に検出された。平面プランは、南北45cm、東西45～70cmを測り、南東側がふくらんだ不整な楕円形を呈する。深さは、15cmを測り土坑内に30×20cm大の礫が埋め込まれていた。その様相から墓坑的な感じが掘り下げ段階から感じられた。しかし、浅くて遺物の出土がみられないことから本土坑の性格を決定することはできない。



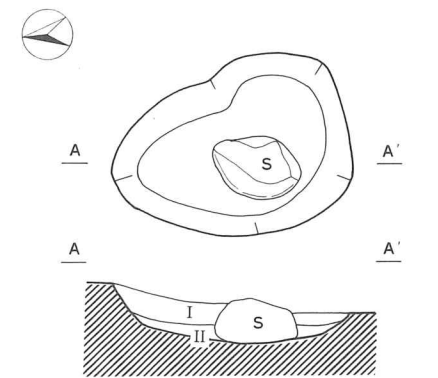
第6図 溝出土遺物実測図

## 4 10区トレンチ出土遺物

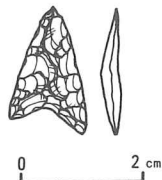
芦内遺跡接点に位置していた10区は、トレンチ内から、石鏃1点、石鏃1点、須恵器壺口縁部1点、内面黒色坏口縁部2点、甕口縁部1点、胴部4点、黒曜石チップ1点が出土している。



第7図 溝実測図(1:70)



I層(黒色土)粘性強い小石粒混入  
II層(黒褐色土)ローム粒子混入  
第8図 10区土坑実測図(1:30)



第9図 10区出土石鏃  
実測図(1:4)

第9図に示した黒曜石製の石鏃は、最大器長2.1cm、最大幅1.3cm、最大器厚0.3cmである。

片方の脚部が僅かに長くなり、やや不正形を呈する。また器面の片方(腹面)には素材剥片の主要剥離面が多く残る。

この他の須恵器、土師器は細片なので器形を知ることとはできないが、8区で掘り上げた住居址出土遺物と大差ないことから、平安時代前期～中期にかけての集落がこの地点まで広がっていたと考えられる。

## 第4章 まとめ

今回の試掘調査によって開発区の遺跡範囲の状況を把握することができた。

先ず、従来からの登録遺跡である芦内遺跡周辺、特に10区からは石鏃、黒曜石剥片、須恵器、土師器が出土し、今まで縄文時代の遺跡ということのみで土器の出土がみられなかったが、新たに芦内遺跡からも内面黒色の坏口縁部を表面採集し、さらに、今回の試掘で前述した遺物、8区での住居址検出に至り遺跡の性格も一部解明することができた。しかし、縄文土器の出土が未だ無く時期判別には至らない。

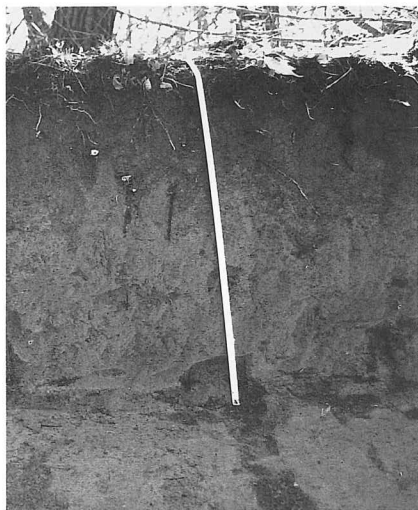
今回の調査で新しく発見した地点は、3区の湧水付近に遺跡の存在が予想されることである。この地点は芦内遺跡から離れた北側に位置しているため、単独の遺跡としてとらえられるが、今後の調査で遺構が確認できなかった場合は、芦内遺跡の生活領域と考えることができよう。

また、2区の土坑状の落ち込みは、尾根斜面に位置しているため生活領域としてとらえた。8区の住居址1軒を完掘することが出来て大きな成果となった。ベッド状遺構と考えられる住居址の構造と、鉄の製錬を想定できる鉄滓が出土し、平安時代中期という時代設定が出来たことも遺跡解明の一端となった。

さらに、黒曜石の剥片が出土した溝は縄文時代の所産であると考えられ、芦内遺跡周辺の湧水の豊かさがこれ等の溝、現在も残っている吉沢堤、清川、大奈良地区の水田への水利用などから理解できる。幸い遺跡の中心部は大塚農園さんが現在も畑を耕作して守っておられる。この周辺は湧水を保護し活用するような開発が望まれる。



1. 芦内遺跡全景（北東より）



2. 1区層序断面



3. 2区層序断面



1. 2区層序断面



2. 3区層序断面



(土器出土断面)



1. 4区層序断面（木の根の跡）



（2 m弱の深い層序断面）



2. 5区桑畑全景



3. 5区層序断面



1. 6区層序断面



2. 7区層序断面



3. 7区林風景





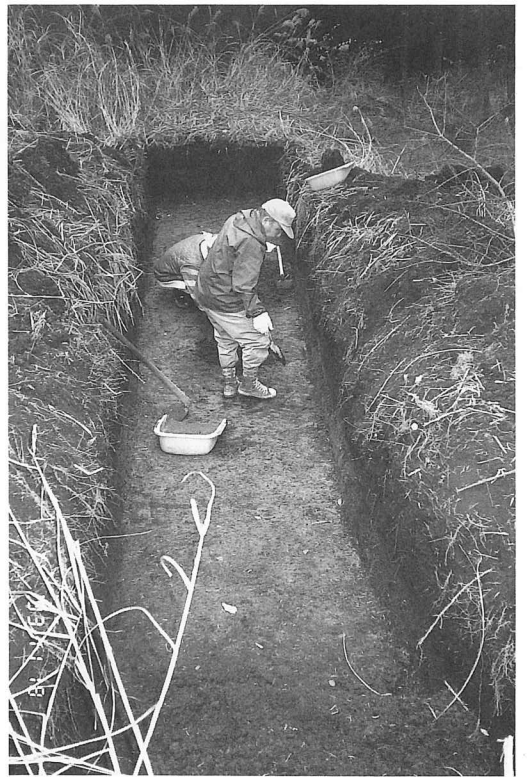
1. 8区湧水付近のトレンチ



2. 9区林全景



3. 10区土器出土小トレンチ



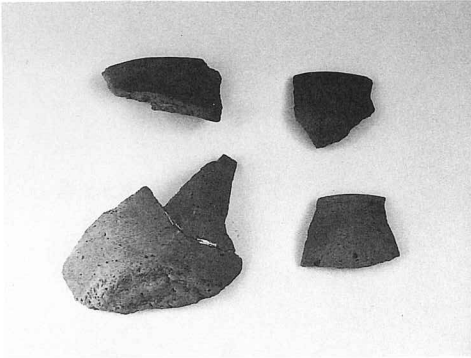
4. 10区トレンチ



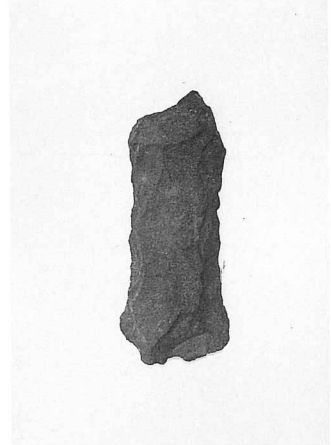
1. 8区住居址検出の林



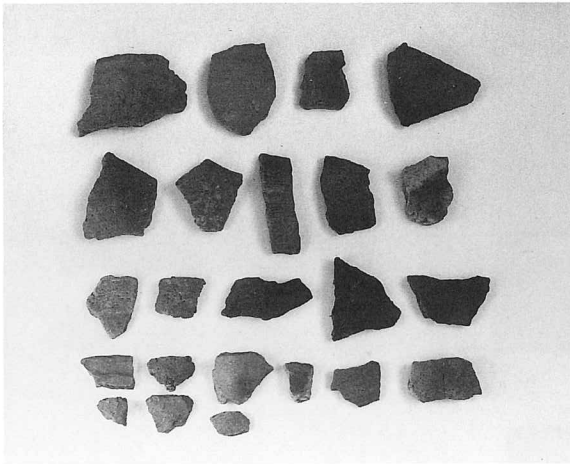
2. 住居址全景（北東より）



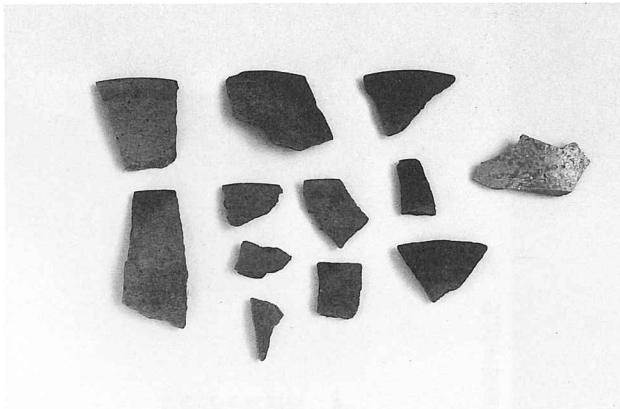
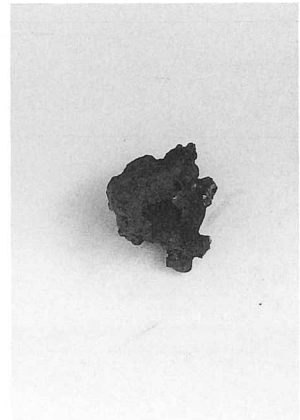
1. 8区住居址出土土器



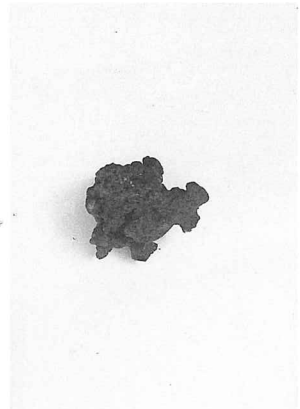
4. 8区住居址出土の石鍬



2. 8区住居址出土瓦破片



3. 8区住居址出土坏、灰釉陶器破片



5. 8区住居址出土の鉄滓



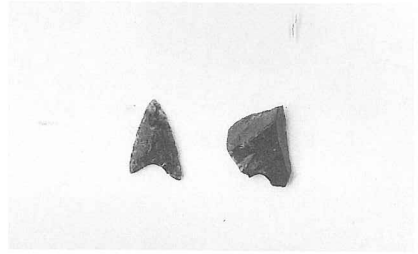
1. 10区溝全景



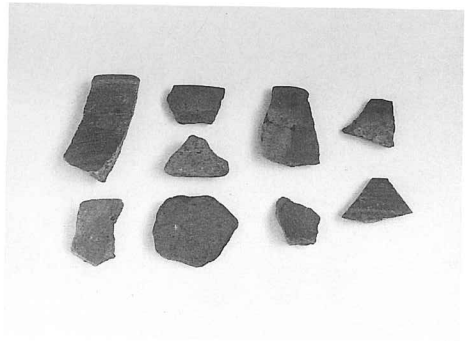
2. 10区土坑全景



3. 3区・9区出土土器



4. 石鏃・溝出土黒曜石剥片



5. 10区出土土器



6. 10区出土石鏃片

白田町芦内開発地区試掘調査報告書

発行日 平成6年3月25日  
編集者 白田町芦内開発地区試掘調査団  
発行者 白田町教育委員会  
印刷所 白田活版株式会社